
ルパン三世 『KIZUNA』

とっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ルパン三世 『KIZUNA』

【Nコード】

N8652S

【作者名】

とつつあん

【あらすじ】

ルパンは同じ夢を見ている

だが、夢の内容は一言しか覚えてはいない

『兄さん』

*この小説は、ルパンと、1人の少年を主体に書いていきます。ど

うか宜しくお願いします。

作者はコメントを貰えるとアイキャンフライー！とか叫んで喜びを表します

どんな助言、批判もお待ちしております

歯車が動き出す（前書き）

お話の第一話

ごゆっくりお楽しみ下さい

歯車が動き出す

近頃、同じ夢ばかり見る

怖い夢ではないし

同じって言っても

ほんの一部しか覚えていないんだけどよ

朝目覚めると、いつも決まって涙が流れている

そして、耳に残っている言葉がある

『兄さん・・・・・・・・・・』

「はっ・・・・・・・・またか」

ルパンは感じる、今日もまた涙を流し

あの言葉が耳に残っている事を

「おいおいルパンよ、本当に大丈夫なのか？気味が悪くて仕方ね

え」

次元がキッチンで、ピンクのフリフリのエプロンを着て、目玉焼きを焼いている

フリフリ？

「うるせー、どうにか出来てたらとっくにやってるよ」

「そりゃそうだけど、よっ」

そういつて、フライパンの目玉焼きを、放物線を描くようにルパンに向かって飛ばす

「アムツ、あふっあふっ」

それを口でキャッチして、そのまま食べるけども

やはり熱かったようだ

「それにな……」

ルパンは目玉焼きを飲み込むと、真剣な眼差しで次元を見据える

「それに？」

「匂うんだ……お宝の匂いがよ」

『歯車が動き出す』

日本にある高校

特に変わったところは無く

偏差値も中の中と、更に普通さを増している

そんな中

1人の少年が・・・

「彼女欲しいな」

暇していた

彼の名は、璃半 景

両親は物心つく前に他界していて

親戚の老父・老婆の家で育ち、今は自立し、1人暮らしをしている

「なあに馬鹿なこと言ってるのよ」

「なんだと！俺だってチャンスさえあれば」

「無理」

「グハッ！そ、即答かよ・・・」

ボソツ「たく、私がいるじゃない／＼／」

「ん？なんか言ったか？」

「な、何でも無いわよ！」

「ふん・・・」

「な、何よ？（ま、まさか、私の気持ちにようやく！）」

「歯に海苔ついてるぞ」

「馬鹿あああ！！！！／＼／」

「うわっ、ちょ、なんだよ！」

この顔を真っ赤にしている可愛い少女は

綾峰 春花

景が親戚の家に預けられた時からの幼馴染だ

見ての通り景に好意を寄せているが

本人はまったく気付いていない

ザワザワ

いきなりクラスが騒ぎ始める

「ん？なんだ？」

騒ぎの元へと視線を向けると

「君が璃半景君だね」

薄茶色のコートを着たおじさんが俺の前に立っていた

「はい、そうですけど」

こんなおじさんと関わりを持った覚えは無いよな、と

頭の中でそんなことを考えていると

「ワシは、ICPOの銭形という者だ。いきなりで、すまんが御同行願えないかな？」

「・・・へ？」

物語は、それぞれの登場人物に始まりを与え

話を進めていく

つづく

歯車が動き出す（後書き）

コメント・駄目だし、いただけると助かります

夢の介入

近頃、よく夢を見る

その夢の中での俺は、怪盗『ホワイト・ラット』として

日々、様々な罠や警備を潜り抜け、お宝を盗み出している

けど、少し気になることがある

その夢が妙に現実味を帯びている事だ

その中で俺は体の自由が利かず見ているだけなんだが

夢の中で怪我をした後、起きている時に確認すると

その傷跡らしきものが薄っすらと残っているんだ

でも、すぐに消えるから気にはしてなかったんだけど

それが一年も続いているのだから、気にもなってくる

これが始まったのは

俺が18歳になった時からだ

最初こそは楽しくて、毎日夢を見るのが楽しみだったけど

今となつては、期待感と少しの恐怖心が混ざっている

それでも、俺は夢を見る・・・

『夢の介入』

「あの、俺何かしましたか？」

あの後、俺はとりあえず警部さんについて行くことにした

春花には猛反対されたけどな

「何で景が捕まらなきゃならないのよ！こいつは何もしてないわよ
！！」

あの暴れっぷりはとんでもなかった

クラスのやつらが最初は頑張っ
て止めたが、止まらず

体育の先生が出て、全ての先生が出て、運動系の全部活の部員が出て

それでも止まらず

「大丈夫だよ春花」

と、頭を撫でてやると

「うん・・・／／／」

こいつは何故か昔から

頭を撫でてやると落ち着くのだ

「絶対に、ぜーったいに帰って来てね!!」

なぐんて感じだった

それに、特にやましい事をしている覚えもないから

堂々としてても問題ないはずだ

と、思ったのだけど・・・

やっぱり事情は聞かなければならないから

パトカーの中で、訊ねてみた

「君、最近巷で、怪盗が出ているのを知っているかね？」

「あの、すみません。新聞とかニュース見ないんで」

基本、そういったものには興味が無い景なのです

もう18だろ．．．．．

「その怪盗なんだが．．．正体は君なんではないかと、いくつかの証拠が出てきているんだよ」

「え．．．」

怪盗と言うキーワードと、俺が正体という言葉で

俺は一つの予想をした

ありえる事のない物で、最悪の予想を

「その名は『ホワイト・ラット』」

「嘘・・・だろ・・・」

夢の中の幻は

突如、現実介入する

そうして

少年の人生は分岐点を迎える

つづく

役者の集い

「おいルパン、本当に日本にお宝なんてあるのか？」

「あゝ、それなんだけどもよ。ちょっと気になる事があつてな」

次元とルパンは今日日本に来ている

ルパン本人は『まだハッキリしてはいないんだけどな、確信はあるんだよ』

だそうで・・・

「もうここまで来たんだ。教えてくれても良いだろ」

「それもそうだな、実はな」

と、ルパンが話そうとした瞬間

ブーン

「ん、あれは・・・やば！」

ササッ

2人は何故かいきなり物陰に隠れた

その車のエンジン音の基は

「おい、何でこんな所でとっつあんがいるんだよ」

そう、銭形警部の乗ったパトカーが走っていたのだ

しかし、ルパンは銭形警部より寧ろ

その隣に居る少年に目がいった

「やっぱりな」

「何がやっぱりなんだよ？」

「さっき言いかけた事なんだがな、あれだよ」

「え、あれって、あの坊主の事か？べつに普通の奴にしか見えなかったが」

「じゃあ、なんでわざわざとっつあんが一緒に居る必要があると思う？ずっと俺たちを追いかけてまわす事しか頭がないとっつあんがだぞ」

「確かに・・・」

「じゃあちよっくら」

「追いかけるか！」

トサトサトサッ

バタンッ

ブルオオオツキイイイ！

そうして2人はニンマリと、悪だくみをした時のような笑顔を浮かべると

急いでいつもの車に乗り込み

パトカーの後を追いかけるのだった

『役者の集い』

「さ、着いたぞ璃半君」

「はい・・・」

景はまだ心が晴れないままでいた

当然としか言いようもない

夢だと想っていた・・・いや、夢だと想いたかった事が

今や、目の前に現実として叩きつけられるかもしれないのだから

「どうかしたかね？顔色が優れんが」

「あ、いえ、べ、べつになんでもありません」

「そうか、ならいいんだが、何かあったらすぐにワシに言いなさい」

「ありがとうございます。・・・じゃあ、1つお願いしても良いですか？」

「ワシに出来る事だったら何でも良いぞ」

「景つて、呼んでもらえませんか？」

「構わんが、ワシが呼んでも良いのか？」

「はい、銭形警部はなんだか信用しても良い気がするので・・・あ！

すみません！失礼なこと言って」

「ハッハッハ、構わんよ。信用してもらえるなんて嬉しい事言ってもらえたんだからな。じゃあ、よろしくな、景」

「はい、こちらこそお願いします」

実はパトカーの中での事なのだが

景も、話を聞いたときは今よりも落ち込んでいたのだけれども

銭形警部が色々と気を使ってくれて

雑談なんかもしているうちに

次第に打ち解けていたのだ

「お疲れ様です！」

「うむ、この子が璃半景君だ。よろしく頼むぞ」

「はっ！」

「それじゃあ景、事情聴衆は少しばかり疲れるが、終わったらカツ丼と一緒に食おう」

「はい」

「それでは、璃半君、こちらに」

「わかりました」

そうして、銭形警部は景を優しい父親の様に、手を振り見送った

しかし、見送った後に

その顔は少しばかり真剣なものへと変わった

「何故、ICPO直々に、景の護衛の命令が下されたんだ？」

銭形警部は、ルパン捜査をしていた

とある日、突如景の護衛の命令を受けたのだが

その詳細までは伝えられなかったのだ

けど、いざ本人に会ってみると

それはごく普通の少年であり

話しているうちに、自分も景を信用しても良いと思うようになり

今では景が犯人ではないと祈るほどまでになっていた

「ま、とりあえずワシはカツ丼を頼んでおくとするか」

悩んではかりいても仕方ないので、施設の食堂を探す事にしたのだ

「「お疲れさまでーす」

「おう、しくるっ」

歩いていると、清掃員の2人が挨拶をしてきた

「あ、ちょっと良いかな？」

「なにか？」

「食堂の場所が知りたいんだが、教えてもらえんかのう」

「ああ、それでしたら、その角を左に曲がって真っすぐ行った所にありますよ」

「どうもすみません。ここは初めてなものでして」

「いえいえ、それでは仕事があるので」

「ありがとうございます」

そのまま、食堂に向かおうとしたのだが

「あの2人・・・気のせいかな」

ふと、清掃員の2人に怪しい感じがした気がしたが

特に気にせず、食堂に向かうのだった

「じゃ、ちよっくらお仕事に参りますか」

「ま、さっきとっつあんにはヒヤヒヤしたけどな」

それぞれの登場人物は

真相を知りたがり

次第にその距離を縮めていく・・・

つづく

ピース

「なに？カツ丼が無いだって！？」

「はい、うちの食堂にはカツ丼はありません。牛丼ならありますが」

「ここは警察の施設だろ、普通はカツ丼くらい用意するもんだろ！」

「そんなの一昔前の時代です。とにかく、無い物は無いんです」

「そ、そんな・・・景に、なんて言えはいんだ」

食堂にたどり着いたのは良かったが

肝心のカツ丼が無かったので、落ち込む銭形警部

べつに、そこまでこだわらなくていいでしょ

景だってそこまで子どもでは無いんだから

「そうだ！出前を頼めば」

「こんな山奥だと来てくれませんよ」

「なあにー！」

『ピース』

「それでは、聴衆はこれで終わりなので、簡単な心理テストを行います」

あれから1時間弱

ようやく聴衆も終わったので

最後に簡単な心理検査を行うことになった

正直、特に何も問題が無かった事が一番嬉しいので

疲れなんて感じることはなかった

寧ろ、身がすごく軽くなった感覚だ

なので、早く最後の検査も終えて

銭形警部とカツ丼を食べたい気分だ

と、思っていると

部屋に白衣を着たオジサンが入ってきた

頭の髪の毛のほとんどが白髪なので、どちらかと言つとおじいさんかもしれない

けど、肌はそこまでヨボヨボでも・・・

「わたしは47だ」

「あ、47なんですか・・・え!？」

「顔に『オジサンかおじいさん、どっちだろう?』と書いてあったぞ」

なんと

考えていた事が全部顔に出ていたらしい

しかし、仏頂面で言われたが、怒っているわけではないようだ

「すまん、この顔は生まれつきだ」

「す、すみません」

「構わんよ、息子も君みたいな反応を示してたから」

「息子さんがいらっしやるんですか？」

「ああ、丁度君と同じ歳かな、ま、出来の生意気息子だが」

「・・・そうなんですか？」

「ん？」

「あ、いや、息子さんの話が出た途端、笑顔になった気がしたので、仲いいのかなって」

気のせいではなく、確かにこの人は笑顔になっていた

「そうだな・いつも、わたしが心配ばかりかけて、よく気を使ってくれたな」

「やさしい息子さんですね」

「まったく、親の心配をするなんて、生意気な息子だよ」

言葉はぶっきらぼうだが、この顔を見れば

誰もが息子思いの良い父親だと理解できるだろう

景も、この人は信頼できる人だと

感覚で感じ取っていた

「おっと、無駄話が過ぎたな、早速始めるとしようか、わたしは仁村 直義、よろしく」

「知ってると思いますが、璃半 景です。よろしくお願いします」

そうして、景は心理検査を受ける事となった

迷路を解くような物だったり、絵を見て判断するものや、質問調査など

普通に進めていって終えた

「判定には少しばかり時間がかかるから、適当に時間をつぶしておいてくれ」

「わかりました直義博士」

「博士？」

「なんとなく、そんな感じがしたので」

「呼びたいなら好きに呼びなさい」

「それではまた」

「ああ、またな景君」

2人は手を軽く振って別れた

カタカタカタ

黙々と打たれるキーボードの音

そこでは、景のデータから怪しい証拠が無いか検査をしていた

『ホワイト・ラット』に関する物を．．．．．

「ん．．聴衆は特に異常なしだな、ま、景君が怪盗には見えないかな」

直義博士も、景が怪盗とは信じていないので

早めに終わらせて景を家に帰そうと思い

心理検査の方のデータを診断した

「け、景が・・・」

そこで博士はパソコンの画面に映し出された文字を目にしていた

『DUAL PERSONALITY』

英語で、そう表記されていた

日本語に訳すと

『二重人格』

しかし、直義博士は腑に落ちない事があった

「何故だ、資料はすべて目を通したが、景にはアリバイもある。たとえ二重人格だとしても、犯行は不可能の筈・・・」

そう、景にはアリバイがある

どこからどう見てもそれは覆せないものだ

「とにかく、調べてみない事には分からないか」

パズルのピースは

1つずつ

その繋がりを見せ始めた

もう一人の登場人物というピースを

つづく

邂逅

人には欲がある

物欲・食欲・性欲・睡眠欲、中には

殺人欲なんてのがある奴も居る

でも

世の中には稀な欲が存在することもある

俺の場合

盗欲、なんてのもな・・・

『邂逅』

「ん、どうでしょう」

その時、景は

「銭形警部はどこに居るんだろう」

銭形警部を探しているうちに迷子になっていた

「えっと、こっちかな？」

そんな感じで適当に歩いていたのだが

・・・こっちだよ・・・

「え？」

声が聞こえた気がしたので周りを見渡したが、誰もいなかった

「気のせいかな？」

・・・お前の探し物は、すぐ、近くに・・・

「探し、物？」

聞こえてきた声

聞き覚えのある、いや

自分の知っている声

夢見るときに出てくる、アイツの・・・

「っ！」

突如景の視界が大きく歪む

・・・わからないなら、俺がやってやる・・・

”景”の意識はそこで途切れる

「しまったな、景と待ち合わせの場所を決めておくのを忘れていたな」

銭形警部は、食堂を後にし

景を探していたのだが一向に見つからず困っていた

「しかし、ここはやけに人が少ないな」

山奥の施設ではあるが、普通ここまで大きい所ならば人もそれなりに居るはずだが

すれ違う人間がほとんど居ない

「君、ちょっと良いかな？」

考えてる時に、後ろから声を掛けられた

「あなたは？」

「仁村 直義、ここに来た少年の検査をさせていただいた」

「おお、それはごくろうさまです」

「ところで、少年を見かけていないかね？」

「少年とは、景の事ですか？」

「知っているのかね？」

「はい、連れてきた者ですから」

「そうだったのか、で、見かけていないか？」

「それが、ワシも探してる最中で」

「そうなのか・・・」

「で、結果はでたのですか？」

「・・・ああ、出たのだが、少し本人に確認しなければならない事があってな」

「そうですか、なら」

一緒に探そう、と言おうとした時

バアンッ

「今のは」

「景！」

銭形警部が直感的に景を感じ

そのもとへと駆け出し、博士もその後に着いていく

「オイルパン、どこにも映ってねえぞ」

「んな訳ねえだろ、しっかり探せ！」

次元とルパンは、警備室で、施設内のモニターを全部チェックして景の事を探しだそうとしていたのだが、一向に見つかる気配が無いのだ

「たくつ、一体どうなって」

「見つかる筈はありませんよ」

「誰だ！」

油断をしたつもりは無い

ただどいつの間にか背中をとられていたのだ

「テープの映像は、俺が”盗”みましたから」

「どういうことだ」

相手は白い仮面を被り、白いスーツを着ていて、歳は17か18歳
くらいの男に見える

攻撃を仕掛けてくるそぶりは無いが、危ないので

スーツの中のワルサーに手をかけたが

「酷いな、”弟”に銃を向けるなんて」

気付けばその少年がワルサーをルパンに向けていて

スーツの中のワルサーが消えていた

けどルパンにはワルサーより、発せられた単語が気になった

「弟・・・？」

「本当に、知らないんだな・・・」

その言葉には、悲しみのようなものが受けてとれた

「くっ、はっはっは！！」

「何がおかしい？」

「あーあ、知ってたならまだ許そうかと思ったけど、やっぱりヤーマタ」

バアンッ

「ぐっ」

ルパンの胸に、一発の弾丸が放たれた

「お前の”三世”の座、俺が”盗”ってやる」

つづく

捕獲

大きな銃声の音

何故かは分からんが、急に景の事が頭に浮かんた

ワシはその勘と、体が求める衝動のままにそのもとへと走る

「あーあ、知ってたならまだ許そうかと思ったけど、やっぱりヤーマタ」

扉を開けた瞬間、ルパンが撃たれていた

ワシの前には景と同じくらいの子供がいて

ルパンがいつも使っている筈のワルサーを手にとっていて

銃口からは少しの煙が上がっていた

そいつは白いスーツの『ホワイト・ラット』

最近ワシも手を焼いていた怪盗……………

「お前の”二世”の座、俺が”盗”ってやる」

『捕獲』

「な、何をやっとるんだ貴様あ！」

ドンッ

いくらルパンとはいえ、目の前の犯罪を見逃すことは出来ない

我に返ったワシは目の前のラットの手を後ろに捻り、勢いよく床に倒した

カチャ

そう、確かに倒した筈だった

「俺は簡単には捕まりませんよ。 銭形警部」

いつの間にかラットに背中をとられて、ワルサーを頭に突きつけられていた

「ど、どうやったんだ・・・ワシは今確かに」

「ん、そうですね、今のところは・・・”盗”ったただけ言っておきましょう」

「くっ、どうすれば」

ドオンッ

全員が膠着状態になっていた状況下で

今度は爆発音が聞こえ、ラットの意識が一瞬逸れ

警部はその瞬間を見逃さずにラットを取り押さえる

「何をやったかは知らんが、今度は逃がさんぞ」

「動くな！」

警部がラットを取り押さえ、安心したのも束の間

いきなり完全武装したやつらが大量で部屋に居た全員に銃を向ける

「な、何だ貴様らは!？」

「その様子だと、銭形警部は何もご存じで無かったようです。ま、それでも俺はいつでも抜け出せますけどね」

「そうはさせないよ」

「あ、あなたは!」

次は、スーツを着た大人が部屋に入ってきて、警部はその人が分かるように、すぐに背筋を伸ばす

「ご苦労だったね。銭形君」

「遠路はるばるご苦労様です!デイル長官!」

彼はICPOの幹部

今回銭形警部に景の監視を依頼した人間である

「君がホワイト・ラットか、随分と手間を掛けさせてくれたね」

そう言って、ラットの顎に手を伸ばし、自分の方に顔を向けさせる

「それが怪盗ですからね」

「それでは、一緒に来てもらおうか」

カチャ

「あなたと行く気は無いので、お引き取り願えませんか？」

またしても、いつのまにかラットは移動していて

今度はデイル長官に銃を向けている

「これはこれは、見事な手口だ。お手上げかな？」

「では、まずは部下に銃を、ッ！」

急にラットが頭を押さえ、ぐらついた

「な、何を・・・」

「なあに、ただ少し眠ってもらっただけだよ」

「く、そ」

ボタン

ふらついたと思ったら今度は倒れてしまった

「連れてけ」

「はっ！」

完全装備をした部下の何人かがラットを抱えて、外へと連れ出す

カランカラン

「け、景」

持ち上げた時に、ラットの仮面が落ちて、その素顔が露わになる

「あ、あの、デイル長官、これは・・・」

「お、銭形君、これでラットは捕まえる事が出来たから。今回の任務は終了だ。ご苦労だった」

「そ、それより」

銭形警部は聞いたかった

何故景がホワイト・ラットなのだと

「すまんね、時間が無いのでこれで失礼するよ。報告書はこちらで処理しておくから安心したまえ」

「おうおう、こっちはガン無視かい？長官さんよ」

次元とルパンが居たにも関わらず、長官とその部下は全く気にしておらず

むしろ眼中にないくらいだった

「ああ、確かルパン一味だったかな。銭形君、彼らの事は気に任せる。博士、こちらへ」

「分かった」

そうして、部屋には三人だけとなった

「景……どうして……」

たしかに、銭形警部は長年ルパンたちを追っていた

けど今はそんな事はどうでもいい

無実だと信じていた景が、よりも寄ってどうして怪盗なのだと

「おいおい大丈夫かとっつあん？」

「ル、ルパン！！生きてたのか！？」

「あつたりまえだろ、俺様がこんな所でくたばつかよ」

胸に赤い血を垂らしているルパンがいきなり起き上がり

何事も無かったように銭形警部に話しかける

「それにしても、ホントに完全無視だったな」

「次元なんて空気にしか感じなかったぞ」

「ホントだったな」

「ルパン」

ルパンと次元がふざけ合うように話していたところに

銭形警部は真剣なまなざしでルパンに話しかける

「ここに居るってことは、景の事も分かっているんだろ。説明してくれんか？」

「へー、アイツ、景って言うのか、元気な奴だったな。なんせ俺の心臓に何のためらいもなく撃ってくるんだもんな」

「ルパン！」

「わかってるよ・・・」

すると、ルパンも真剣なまなざしへと変わり、話をする体制になる

「大まかな事情だけなら、俺も把握はしてるんだけどもよ。俺が知ってるのはあくまでICPOのあのお偉いさんの狙いであって、景自身の事は知らない。だから、情報交換と行こうか」

「ああ」

「まず、あのお偉いさんの狙いだがな、ラットの逮捕なんかじゃ無い。捕獲だ」

「捕獲？」

「どうやら、都合のいい盗み屋を探していたようでな、でもってソ

イツを洗脳でもして、暗殺者に仕立て上げてのし上がろうとしてるわけ」

「どうして盗み屋なんだ？そんなのいくらでも居る筈・・・」

「ああいう怪盗は、忍び込むのも盗むのも得意だ。だから殺しも出来るし、情報を盗む事も簡単。いざとなったら捨てれば良い」

「そこで都合よく居たのが『ホワイト・ラット』」

「そういうことだったのか」

「ま、軽く調べただけだから、まだ詳しい事までは分かって無いけど、大まかな所はこんな感じだな。で、とつつあんの知ってる事は？」

「それなんだが、景はお前から見てどうだった？」

「どうだったって、やけに敬語を使ったり、殺しにも躊躇が無いとか、あとは・・・まあそんなくらいかな？」

「ワシが知っているのは、あんな奴では無かった。どこにでもいそ

うな普通の男の子でな、殺しや盗みなんてのもやらない目をして
いた」

「ん、とつつあんが言うんだから。合ってるか・・・」

「で、俺たちの事は捕まえていいのか？」

次元が顔をにやけさせながら銭形警部に聞いた

「ワシの仕事は犯罪者の逮捕、そして、一般市民を守ることだ」

「ということとは」

「景を取り戻すために協力してもらおう。お前たちを捕まえるのはその
後だ」

「ほんじゃま、いっちょ暴れに行きますか！」

こうして、銭形警部・ルパン・次元は手を組み

景を取り戻し、悪事を裁く事を目標に一致団結した

そして、三人は感じていた

この事件は

まだ奥があると

つづく

捕獲（後書き）

遅くなつてすみません

大学の講義が忙しくて更新が遅れてしまいました

これから、4、5日のペースで更新するかもしれません

皆さまにはご迷惑をおかけします

それでも読んでいただければ嬉しいです

先代からの願い

「それで、ワシらは今どこへ向かっておるんだ」

あの後、手を組むことになった銭形・ルパン・次元

ルパンの案内により

とある場所へ行き、情報を整理するそうなのだが

「ICPOの企みは分かっけてつけどもよ、アイツの情報はまだ分かり切ってはいないんだよ」

「そついや、あの小僧お前の事を”弟”とか言つてたな」

「何？景がルパンの弟！？」

「ああ、とつつあんが来る直前に言つてたんだよ。ルパンに向かつてな」

「本当か!？」

「けどもよ、俺に弟なんて覚えが無いんだよな。知ってるとしたら、父親と母親だし」

「じゃあ、今そこへ向かっとるのか」

「いんや、あの人たちの事は俺もよくわかって無いから、逆に知ってたら自分の情報網にビビるぜ」

「おいルパン、またお預けか？」

『先代からの願い』

「次元そう焦るなって、ほら、そんなこんなでもう着いたぞ」

「え、ここか？」

三人を乗せた車が止まったのは、田舎に建っている一軒の民家

「ほんじゃま、ちょっくらお邪魔しますか」

車から降りて、玄関へと向かう

「おい次元、ここはお前たちのアジトか？」

「いや、俺は知らないぜ」

ピンポン

「はい、ちょっと待って下さいね」

インターホンを押すと、家の中から声が聞こえてくる

ガラガラ

「どちら様ですか？」

戸が開くと中から優しい顔をした老婆が出てきた

「どうも、ルパン三世です。璃半景の事で話を聞かせていただけませんか？」

「おいルパン、そんな急に」

いきなりルパンが堂々と言うものだから

次元が慌てたが

「・・・中へどうぞ」

「おじゃまします」

老婆はまどつていた雰囲気を変えて、一行を中へと案内する

「ルパン、いったい何がどうなってんだ？」

部屋に連れて行かれ、茶を用意するからと、その部屋で三人が待っていた

しかし、あまりにもすんなり行きすぎなので銭形警部が尋ねた

「それが・・・俺にもさっぱり」

「は？」

「いや、アイツがここに引き取られた子どもだったのは知ってたから、少しカマ掛けたんだが、大当たりのようだ」

「お待たせしました」

少々雑談をしていたら、お爺さんとお婆さんの2人が真剣な面持ちでやってきた

「あなたが、ルパン三世ですね」

「そうです。けど、なんで俺の事が？」

「そのように知らされていたのです。アレを」

「はい」

お爺さんがお婆さんに、何かを頼み、それをルパンたちに見せる

「あの子を預かる時、この手紙も一緒にあったのです」

「見ても・・・いいですか？」

「どうぞ」

——この度、この子を預かってくださり誠にありがとうございます。
います。私たちは今の立場上、この子を育てる事ができません。な
ので私たちがこの子に愛情を持つことも、心配することも、名をつ
けてあげる資格ありません。ですが、2つだけわがままを言わせ
てもらふ事をお許してください。どうかこの子には、私たちのことを
教えないでください、出来る事なら、事故にあつたと伝えてくださ
い。それと、この子には特別な力があります。その力は、おそらく
18歳頃になった時に現れるでしょう。その時、三世を名乗る者が
現れます。その者がこの子のことを聞きに来た時は、どうかこの事を
伝えてください。

『三世よ、鼠を救うも壊すもお前次第だ。しかし覚えておけ、白だけでは鼠は倒れてしまう。黒を創り、それを見届け、決断はその後にせよ。』

ルパン二世より――

「初めは意味がよく分かりませんでした。景が捕まえられたと連絡を受けた時、この手紙の事を思い出し、そのすぐ後にあなた方が来たのです」

「そうですか・・・」

「まさか、あんな良い子だったのに、こんな事になるなんて、ううう」

お婆さんは我が子を想う母の気持ちで、景を心配し、涙を流す

そして、それを見てお爺さんが何かを決心した顔になり

「ルパン三世さん、1つ、おいぼれの一生の願いを聞いていただけませんか？」

「なんですか？」

「あの子を、景を救って下さい！ 私たちには、子どもが出来ず。このまま終わるだけだと、昔は考えていた。けどそんな所に、一筋の光のようにあの子が家にやってきた。あの子はもう私たちの子どもも同然なんです。本当は、自分で助けに行ければいいが、見ての通り、私たちはただの年寄りでなんの力も持っていない。もし金が必要なら用意します！ 死ねと言われれば死にます！ だから、どうかあの子を・・・救って下さい！！」

お爺さんは思いのたけを吐き出すようにルパンに告げ、土下座をして頼む

「お爺さん、顔を上げてください」

銭形がお爺さんの背中を優しく支え、起き上がらせる

「俺たちはハナからあの小僧の所に行くところだったしな」

「では」

「必ず、景を助けてみせます。だから、安心して待っていてください」

ルパンは優しい顔でお爺さんとお婆さんにそう告げる

「ありがとう、ござい……ます」

お爺さんとお婆さんは、三人の優しさから、その目から涙を溢れさせながら礼を言ったのだった

「ううは、どっだ・・・」

う
ぐ

先代からの願い（後書き）

更新が遅れて申し訳ありませんでした。

次回は5日以内の更新になります。

始まり

「ここは、どこだ・・・」

ふと意識が覚醒する

普通はゆっくりと睡眠から体が目覚めていくが、たまに、いきなりパツと目が覚めることはないだろうか？

目覚めた体がまずすること”目を開く”

本来ならば、自分の見知った風景が視界に映るはずでしょう

しかし、景の目に映ったのは・・・

「なんだ、この絵？」

周囲の空間は岩で形成されていて

そこに彫られた絵が、景の目に入ってきた

「ここは何かの遺跡か？でも・・・」

そう

景はこの絵を見たことが無かった

そりゃ、初めて見たものなら、見たこと無いのは当然だ

だが景には判る”地球上で公にされている遺跡ではない”

皆さんも

神話や歴史に興味を持って調べたことは無いでしょうか？

景には、今現在まで世界で公表されている遺跡や遺産など

知らない事が無いと言っても良いくらいの知識がある

だからこそ

自分の目に映る絵が、自分の知りえる物ではないことが判る

「でも、どこかで見たような・・・」

不思議なことに

知識には無くても、どこか懐かしい

そんな違和感を感じていたのだ

そして調べてみようと思って、手を触れてみた

・・・うつ、うつうつ・・・

「え・・・」

自分がその絵に触れると、突然に絵が唸りをあげて光始めた

・・・なぜ・・・だ

「なんだ、こいつ」

・・・なぜ、なんだ・・・

訳も判らなかったが

景はただ呆然と目の前の絵が語る言葉を聞くしかなかった

・・・俺は・・・なんの為に・・・

目の前の絵が語る言葉は、どこか悲しげで

泣いているようだった

「お前、誰なんだ？」

・・・あいつが・・・あいつのせいで!!・・・

そこで景の意識は途切れた

『始まり』

「じじは・・・」

「気付いたか坊主？」

「え？」

さつきまでとは違い、自分は普通のへやのベッドの上に寝かされていて

隣には、ショットガンを持ったガタイのいいハゲたおじさんがいた

スキンヘッド、初めて生でみたけど・・・

ホントに髪無いんだな

「お前さん、今失礼な事考えなかったか？」

「な！？」

「こんな状況でよくそんなことを、目の前に銃持ったイカした男がいるんだぜ」

「イカしてるかは人によりますけど」

「ん・・・確かに」

「ところで、俺は何で寝てるんですか？たしか、検査が終わって警部さんの所に行くはずだったけど」

「ああ、それなら大丈夫だ。警部って銭形のことだろ」

「え？知ってるんですか？」

「知ってるもなにも、護衛の任はあいつから俺に移ったんだよ」

「は？」

「ま、そういうことだ、俺はトーマス・ガブリエル、よろしくなつと」

「イテッ！」

豪快な性格の人なんだろう、思いつきり背中をたたかれて

物ッ凄く痛い・・・

「でも、俺の護衛ってまだ続くんですね」

「あ、それなんだけどよ」

「失礼するよ」

トーマスが何かを話そうとすると、部屋にいきなり狐が入ってきた

「誰が狐だ！」

「どうしたんだい長官殿？」

「なんでもない・・・はじめまして、景君、ICPOのデイルだ」

「ど、ども」

「いや、ラットと呼んだほうがいいかな？」

「・・・え？」

「とぼけても無駄だよ、こちらの調べはついているんだ。君がホワイトラットだつてね」

何をいつているんだ・・・

自分が、ラット？

最も信じたくない現実が、景の胸に穴を開ける

だが、自分には疑う余地がない

実際、自分には何故か判らないが、言われても否定できる自信がない
さつきだつて、急に変な声が聞こえたり、めまいが起きたり

訳の判らないことばかりだ・・・

さつきから目の前の男が何かを自分にしゃべっているけれど

何を言われても、頭に入っていない

「あとは頼んだぞ」

「はいよ」

ガチャリ

「大丈夫か坊主？」

「あ・・・」

「まあ、その様子だとお前さんは本当に知らなかったみたいだな」

「・・・」

「へっ、そう落ち込むなって、世の中、なるようになるもんさ」

「ありがとうございます」

「ん、元気ねえなあ・・・そうだ！」

「？」

するとトーマスは部屋の隅においてあった大きなカバンをあさり始めた

しかしでかいカバンだ

きつとあの中には山ほどの銃が入ってるんじゃないか？

すると、なにか珍しくてカッコイイ銃を見せて喜ばせようとしてるのか？

だとしたら外れだ

俺も小さい頃は喜んだかも知れないが、今の俺は遺跡とかにしか興味はないんだ！

「ほれ」

「・・・え？」

目の前には、このムキムキハゲには到底似合うことのない物があった

「ほれ、これで元気だしな」

「あ、えつと・・・」

それは・・・

「あれ？嫌いだった？……ケーキ」

「そのカバンの中って……」

「みたいか？ほれ」

「うわあ」

中には、見るだけで胸焼けを起こしてしまいそうな量のケーキやお菓子がびっしりと綺麗に並べられていた

「なんだよ、まあた失礼なこと考えやがって」

「え！？」

「お前、顔が正直者すぎるぞ」

「……よく言われるよ」

「まゝ変な気を使われるよりはましだけどな」

「ほんと？はゝ、疲れた」

「ほんとに気兼ねないな」

「いいじゃん、トーマスも俺のこと景って呼んでよ、今度坊主って

言ったらその頭ぴしぴし叩くからな」

「はっはっは、よろしくな景」

「よろしくトーマス」

お互いが出会った状況は普通ではない

けれども、人の出会いに普通であるかどうかは関係ない

むしろ、出会いに普通はない

そんな2人には

何が待っているのか……………

「え？わたしが」

つづく

検証（前書き）

今回はかなりグロいかもしれないので、ご注意ください

検証

みんなは、人が殺される映画、アニメ、漫画

見たことは一度はあるとおもう

怖いものだし、自分はやりたくもないし、やられたくもない

実際に生で見た人の数はそこまでは無いだろう

だけど

ある日突然、目の前で人が殺されたら・・・

デイルが出て行って、その後トーマスとケーキを食べていると
急に知らない奴らが数人入ってきて俺を拘束してきた

少し焦って、トーマスに目配せをすると、彼の笑顔が怖かった

別に彼の笑顔が気持ち悪いとかじゃない、ただ、人が嬉しい時にする笑顔ではないと思った

あれほど豪快な男なのに、何故あんな顔をしたのだろう

しかし、そんな心配もすぐに無くなった

いや、無くなっただけじゃない、それよりも嫌なことが俺に待っていた

あの後、俺は広い部屋に連れて行かれた

部屋の中は一面白で、中には俺とトーマスしか居なかった

「なあトーマス、これから何が・・・」

「すぐに判るさ」

相変わらずトーマスは不気味な笑顔のままだ

だけど、今は壁の一点を見ている

気になって俺もその方向を見ていたら

急に壁の一部が開いて、人が一人転がってきた

「・・・え？」

手足が拘束されていて、猿轡を噛まされている人だ

「来たか」

訳が判らなくなっていたが、トーマスは嬉しそうな声を挙げるとその人の元へと行くと、俺のところに連れてきた

「え、ちょ、大丈夫で・・・」

ブシャアアアアア！！

大丈夫ですか？手を伸ばして、その人を自由にしてやろうと思った

けど、俺の手が届くことは無かった

その手には何故か血がついていた

指先から肩まで

留まりきらない血が肘から流れ落ち、よく見てみると

俺の体のほとんどが血にまみれていた

何故、なんで、どうして、俺はなにかした、いやしていない

思考はその機能をほとんど停滞させていて、答えを捜し求めるように自分の視界にあるものを整理していった

すると、トーマスの手に血まみれのサバイバルナイフが握られていて

目の前にいた人は首から大量の血を噴出している

「トーマス……なに、やってんの……………」

「わりいな、これも仕事のうちだな」

”目の前の事実を受け入れるなって事だ”

でも、そうしているうちに顔に何かが当たって落ちた

ナンダコレハ

そこには人の顔だった物が転がっていた

「・・・あ・・・ああ・・・ああ・・・あああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああ
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
あああああ！！！！！」

『
検証
』

「作業の方はどうかね？博士」

「デイル君・・・まだ始まったばかりだ。何が起こるかはわたしにも判らんよ」

そこには博士が渋い顔をしながら、部屋に入ってきたデイルに顔を向ける

「そう眉間にシワを寄せるものではないよ、もっと笑顔でなければ」

「すまん、これは生まれつきだ」

デイルは博士に言葉を向けてはいるものの

興味の対象にずっと顔を向けて、博士も自分の作業の対象へと視線を戻す

部屋には大きな窓があり、そこからは景とトーマスと・・・肉の塊が見えている

「それにしても、悪趣味だな・・・」

「ふふっ、何をおっしゃるんですか、ここまで楽しいことはそうそうありませんよ」

デイルの顔には、まるでオモチャを買ってあげると約束された子どもの表情が窺える

その笑顔はどこまでも冷たく、どこまでも残酷である

「それに、この研究だって、博士は進んで参加なされたでしょう」

「・・・・・・・・」

「まあ、あなたがどんな目的を持って参加なされようと、どうでもいいがね」

目の前では、普通の人だったら発狂して逃げ出してもおかしくは無いことが起きているのに

2人にはただの日常の風景のように見えているのだろうか

ただただ、自然体で眺めていた

そこには、逃げようと体を動かしているのに

それを良しとせず、自分の前に引きずりだし

再び肉塊をより残酷に引き裂いていく

そんな、恐怖に支配された少年と、嬉々としてそれを行っている大人がいた・・・・・・・・

「なんでカツ井がないんだ！」

「しょうがねえだろ！売り切れてたんだから」

「捜査にカツ井は必須なのが判らんのか！！」

「これは捜査じゃねえっつの！！」

「なんだとー！！」

「なにやってんだか……」

狭い車の中で、ルパンと銭形が変なことで喧嘩して、次元はタバコをくわえながら一人目の前を注意深く見ていた

「……お？」

「来たか！」

慌てて銭形との論争をやめて、ルパンが後部座席から前の席に身を乗り出す

「にしてもよルパン、あんな娘つ子を連れて行くのか？」

「ああ、これからの小僧には必要だと思ってな」

ルパンと次元の視線の先には、一人の少女がいた

「おいルパン、誘拐ならワシは反対だからな！」

「かったいこと言っなよとっつあゝん、それによ、あの小僧がどうなってもいいって言うのかよ？」

「そ・・・それは・・・」

珍しく煮え切らない銭形である

「よし、それならいっちょ行きますか！」

ガチャッ

ブウウウウウウウウン

「うわぁわぁああ!!」

急発進させた車は、猛スピードで少女へと迫る

「え？」

音に気がついたのか、その方向へと顔を向ける

見ていると、段々と車一台が自分に迫ってくる

こんな状況になったら、どうします？

「ちよ、わ、わぁぁぁあああ!!」

逃げる

とにかく逃げるしかないであろう

だが無情にも、車はそれでも自分に向かって走行してくる

「な、誰か！助け・・・」

その後の言葉を、少女は言えなかった

別にぶつかった訳ではない

「あれ、警部さん？」

「君・・・景と一緒にいた子か？」

「警部さん！！景はどうなったんですか！？景はなににも悪いことをするようなやつではないんです！そりゃ、たまに私が転んだ時とか私のパンツ見たり、ぶつかって転んだ時とか私のむ・・・胸を・・・／＼・・・ああああ！！考えただけでム力ついてきた！！やつぱり逮捕を、いや、やつぱり」

「・・・なんだこいつ」

車に連れ込んだ少女は、銭形の顔を見るなりいきなり自分の言いたいことをマシンガントークで投げつけてきた

そのおかげで、三人はあつけにとられるしかなかった

かの有名なルパン三世でも

かの早撃ちガンマンの次元大介でも

かの優秀な警察、銭形でも

この少女には勝てない気がした・・・

「えっと、綾峰 春花ちゃん・・・でよかったかな？」

「この前だって・・・はい、そうですね・・・あなたたちは？」

「俺は、ルパン三世っもんなんだけど・・・単刀直入に言うとな、璃半 景を助けるのに、君が必要なんだ」

「え？わたしが」

単刀直入すぎるだろルパン・・・

このルパンの言葉が、何を意味するのか

答えは、ルパンの中から・・・・・・・・

つづく

検証（後書き）

作者のブチマケコーナー

「はい、今日は傭兵のトーマスさんにきていただきました、パチパチ」

「おい、なんなんだこのコーナーは」

「よっ！さすがトーマスさん、よくぞ聞いてくれました」

「しかもなんで俺なんだよ？今回ものすごく台詞少ないのに壊れてたぞ」

「んー、台詞が少ないのはブチマケルと、作者に力が無いからです！！」

「お前さんだろ・・・」

「そんなこと言っちゃうと泣きますよ」

「泣け」

「ひどい！そんなこと言う人には美味しいオペラあげません！！」

「くっ・・・」

「そんな、血涙流さないでくださいよ」

「わかった・・・俺が、悪かった」

「あ、あげますから・・・」

「そんなこんなで次回、俺はもっと過激になっちゃうかもよ!!」

「ちょ、俺の台詞!このコーナーしか俺しゃべれないのに!!次回からもこのコーナーやるんで、皆さん痛い目で作者を見てね!!」

「お前は変態か・・・」

「俺は変態だ!!」

次回へつづく

ルパン、阻まれる

「・・・おいルパン、冗談だよな？次元は何か知ってるのか？」

「いんや、俺も知らねえよ・・・ルパン、欲求不満ならせめてもう少し歳がいった女にしろよ、それともそいうのに目覚めたのか？」

「ヌッフッフ・・・とつつあんに次元、今の俺はいたって真面目だぜ」

まあ、2人が不安がるのも無理はないと思われる

だって今の状況を説明しろって言ったら

”世界を救うためには餅巾着が必要なんだ！！”

とか言ってるのと同じようなもんだ

だけど、ルパンにはなにやら考えがあるようで、逆に銭形と次元がオカシイとも言つかのような態度だ

「とつつあん、戦時中、英雄と呼ばれた軍人は、どうやってその力を得たか知ってるか？」

「はあ？なにを・・・」

「まあまあ、とにかく」

「そりゃ・・・腕っ節が強かったんじゃないのか？」

「んゝ、それもあつけどよ、次元は？」

「・・・・・・殺戮か」

「正解」

「どういうことだ？」

「とつつあん、確かに戦いには腕っ節は必要だ。けど、まずは人を殺せるようにならねえといけねえだろ、戦場に立つた奴にはまず、人を殺すことそのものを受け入れなきゃなんねえ、それが出来なきゃ死ぬだけ・・・ただし、そんな義務的に殺しを経験した奴はどんどん深みに嵌っていく」

「俺たちはそういうのじゃないから、そんな衝動はねえしな」

「それに、内戦の起こる地域で、子ども洗脳して兵士にする場合もある。これはどうやるか知ってるか？」

「んゝゝゝ、催眠術か？」

「そんな難しいことじゃねえよ、その洗脳方法はな・・・まず目隠しをして銃を持たせる。それで、腕を添えて無理やり撃たせるんだよ」

「撃つだけだったら問題ないだろ」

「勿論、続きがあるんだよ、それで撃たせた後に目隠しを外すと・・

自分と同じくらいの歳の子どもが5人くらい死んでるんだよ」

昔、アフリカの一部の地域では本当にあった話だ

そのときは、政府に反抗するため

一般市民の腕などを切り落として、増税を減らそうとしたり

使えそうな大人はタイヤモンドを採掘させる要員にしたり

子どもは兵士にする

この洗脳を受けた子どもは、元からいた人間から”お前のやって
いることは正義だ、正義を行えばお前は欲しいものも何でも手に入れ
られる、お前は正しい”などと、いつの間にか本当に正義だと思い
込んだ兵士にされてしまう

「それにな、本人にやらせなくても、その光景を繰り返し目に焼きつかせたりしても、同じく心は壊されるんだよ。あの狐野郎のことだから、とりあえず今言った奴だろうさ、心を壊した後に言葉を刷り込んでいけばいいんだし」

「そ、そんな・・・」

「あの狐、調べてみたけどもよ。よくあそこまでやってバレてないなってレベルだしよ」

「なに？」

「調べたこつちの胸が痛くなるくらいだよ。麻薬に違法な武器の密売・製造、それに殺し・・・掘れば掘るほど出てきたんだ」

「じゃ、じゃあ景は!-!」

「そこで春花ちゃんの・・・」

バコッ

「冗談じゃ無いわよ!-!」

「は、春花君？」

今までただ黙って話を聴いていた春花だが、耐え切れなくなったのかいきなり銭形を押しつけてルパンに突っかかってきた

「なんで、なんで景がそんなことされなきゃいけないのよ！アイツが何をしたって言うのよ！！」

整った顔立ちで、普通に可愛い部類に入るであろう春花の顔は

その目からとめどなく涙を流し

ルパンに掴みかかって睨みつけている

「ぐ、ぐるじい」

「お、おい嬢ちゃん、落ち着きな」

「どうにかならんのかルパン！！」

次元が運転しながらも、そんなの関係ないというように銭形も涙を流しながらルパンに掴みかかってきた

めんどくさい人が増えてしまった

それによってルパンは怪力の銭形と必死の少女の火事場の馬鹿力を一身に受けることになっている

これから推測される結果はお分かりだろう

「ぐぐぐぐ、ぐえっ……………」

「お、おいルパン？生きてるか？」

「景が何をしたって言うのよー！！」

「ルパン！どうにかならんのかー！！」

銃を使わせたら右に出るものはいないとされた次元でも、泣きじゃくる2人を止めることはできないのであった

いわゆる面倒なやつらだったのだ

『ルパン、阻まれる』

あれから、どれだけ経っただろう

逃げることも許されず

延々と惨殺を見せられて……

「トーマス君、今日はここまでいい」

「もうちょっといじっていたかったんだけどな」

笑顔のトーマスは、子どもがもう少し遊びたいというような顔と同じだが

全身が真っ赤に染まっについて

その手には、ただの肉と化した人だったものが握られていた

「それもボロボロだろう、どのみち景はもう見えてないよ」

「ちえ、わかったよ」

名残惜しそうに肉を捨てて、景の元へと足を進める

しかし、恐怖の対象が近づいているのにも関わらず

景が動く気配は微塵も感じられない

「部屋に戻しておけばいいか？」

「ああ、頼むよ」

そのまま無抵抗の景を担ぐと、トーマスは血まみれの部屋を出ていった

「博士、あなたを採用してよかったと改めて思いましたよ」

デイルは満面の笑みで、不気味なほどの笑顔で博士を賞賛する

普通であれば、最後は狂って逃げ出す者も出てくるであろう惨状を前にして・・・

「最近は臆病者ばかりで、なかなか引き受けてくれる人間が居なくて、逆に求めすぎてるのは途中脱線しかねませんからな」

「わたしはただ、気になるから研究してるだけだよ・・・」

「いえいえ、ご謙遜を、最初から最後まで目を離さずしっかりとデ

「タを取っていた姿はなかなか惚れ惚れしました」

「・・・」

「それでは、引き続きお願いしますよ」

プシュウウウウ トン

そのまま、デイルは上機嫌のまま、博士を残して出て行った

「わたしは・・・」

博士は、どこを見るでもなく

ただ何かを思い浮かべている

その表情は、後悔や悲しみ、辛さを感じているようだった

「っ！？誰だ？」

急に背後に気配を感じたのだ

本来ならば部屋の自動ドアの音がして、誰かが入ってきたことを確認するが

音はなにもせず、色濃い気配が博士の背中に伝わってきたのだ

「なんだこれは？」

後ろの気配が誰なのかを確認しようと振り返ったが

そこには誰もおらず

一枚の紙が落ちていた

『お前の計画は俺様が盗んでやる。痛い目を見たくなければ今すぐ研究をやめることだな』。

ルパン三世』

「ルパン・・・悪いがやめるわけにはいかないんだ」

博士のその顔は、怒るわけでもなく、馬鹿にするわけでもなく、ただ申し訳ないといった顔つきだった

「警備を強化させるか、トーマス……」

博士のその表情にはどんな意味があつたのか

それを知るには、まだ早い……

つづく

ルパン、阻まれる（後書き）

作者のプチマケコーナ

「おい作者（屑）」

「なんですか？前回あげたケーキをまだ味わっているトーマスさん」

「前回の後書きに、俺がもっと過激になるとか言ったくせに、逆に残虐性が見れただけじゃねえかよ！むしろ読者俺の内面知ってドン引きだよー！！」

「いいじゃん！！いいじゃん！！トーマスはそういうイメージなの
」

「よくない！そんなことばかり言ってるから、みんなお前をさげすんだ目で見えるんだよ」

「ああ、全身に快感が・・・」

「まあ、次回も読んでやってくださいなー！！」

「モンブランあげちゃうよ」

「イイヤッホーーーーーーイ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8652s/>

ルパン三世 『KIZUNA』

2011年12月16日21時54分発行